

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (152)

2024年5月の作品は

しゆみせんぎめいならびにじよ
「須弥山儀銘并序」

— 2千年前の言葉から —

展示テーマ

～「須弥山儀銘并序」と円通～

仏教とは何か、天文学とは何か。考えても尽きないような問いである。そんな問いに挑戦したのが、天台宗の僧である円通だ。もとは日蓮宗の寺院の出自だが、改宗を企てたため寺院から排斥され、天台宗に転じている。

そんな彼が生涯をかけて取り組んだのが、仏法護持、殊に「梵曆普及」である。「梵曆」とは「仏教天文学」に通じ、古今東西の天文学の知識をもとにして最大公約数的ないわば「模範」となるものである。廃仏運動への一縷の望みをかけて円通を中心に成し遂げられたこの学問の体系は、その意味で模範であることを“目指した”と表現する方がより正しいのかもしれない。なぜならば、円通らによって主張された梵曆説と天文学との相違は科学技術の進歩した現在の立場からでは見過ごすことができないからである。一方で、円通の熱心な学問探究の姿勢と彼によって説かれた梵曆説は、古今東西の天文学と仏教に根付いた思想を掬い上げるもので、非常に解説しがいのあるものである。



「須弥山儀銘并序」(1軸)

江戸時代

作者：円通 (1754～1834)

版元：不明

縦 173cm × 横 62cm

円通が考案した「須弥山儀」を平面に表した図。上部3分の2ほどのスペースを用いて解説、下部3分の1には詳細な須弥山の図が書かれている。

円通がこれを作成するに至ったのには、当時の西洋天文学の流入が影響している。円通の梵曆理論は、その着想を仏典のみならず、西洋の自然科学(西洋天文学)から

も得ている。彼は大変な努力家で、15歳の時にはすでに当時西洋天文学理論の紹介書である『天経或問』を読んでいる。この本をきっかけとして、円通は平らな世界像を背景に持つ仏教思想と西洋近代における地球説や地動説との違いに疑問を抱くようになっていく。

このようにして円通とその弟子らによって始まった梵曆運動は、西洋天文学の流入に対抗するものであり、自然主義的な世界像に対する伝統主義的なリアクションであるという解釈がなされることが多い。しかし、ここで問い直したいのが、円通が通宗派的で学際的な視座を持った人物であり、梵曆運動が単なる「反抗勢力」ではないという点である。円通は、「須弥山儀銘并序」に続いて刊行した『須弥山儀銘并序和解』の中で、須弥山儀は須弥山を中心とした世界をモデル化したものであり、当時の西洋天文学で明かされた事実と整合性が取れる「須弥界」として概念化することが目的であると述べている。つまり、円通にとっての梵曆運動は、仏教と西洋天文学との整合性を保ちながら、仏典中の記述を裏付ける為のものであったといえる。

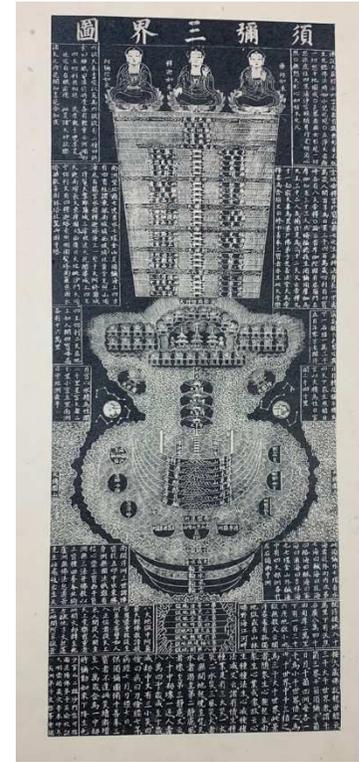
展示のみどころ

～『俱舎論』と「須弥山儀銘并序」から覗く宇宙～

須弥山の世界像は、現在の世界像とは全く異なるものである。下から風輪、水輪、金輪、地輪で構成されている。まず、虚空の中に風輪というものが浮かんでいる。この風輪は作品中ではほかの輪と同じ大きさで描かれているが、小乗仏教の綱要書とされるインド5世紀の書物『俱舎論』によれば、その直径、厚さは他の3輪よりものはるかに大きい。その上の水輪に続く水輪、金輪だが、現在の“金輪際”という言葉はこの金輪からきており、“地面のある金輪の際めいっぱい”、“真底”“最大限の”、という意味につながる。



金輪上には海水が満ちており、須弥山を含む9つの山がある。これが「九山八海」と呼ばれるものである。九山とはその名の通り、中央にそびえたつ須弥山と外周を囲む鉄圍山、そしてその間の金でできた7つの山脈（持双山、持軸山、檐木山、善見山、馬耳山、象耳山、尼民達羅山）を指す。九山の間にそれぞれ八海がある。八海には八功德水が満ちている。八功德水の特質とは、甘い、冷たい、柔らかい、軽い、澄んでいる、臭みがない、喉越しが良い、お腹を痛めることが無い、である。ここで注意すべきなのは、従来の須弥山図の多くは7つの山脈を円形で表している点である。『俱舎論』に従えば、それらは四角で表されるようだ。海中の四方にはそれぞれ東勝身洲、南瞻部洲、西牛貨洲、北俱盧洲の4島があり、私たち人間は南方の瞻部洲に住んでいるという。その地下には恐ろしい八大地獄がある。



さらに天空は三十三天に分かれ、その1つの喜見城に帝釈天が住み、他の三十二天を支配している。その上には五段界に分かれた世界があり、最上段の悲想非非想天（有頂天）というところが如来の世界である。これら須弥山が千集まったものを一小千世界といい、一小千世界が千集まったものを中千世界という。大中小の区別がある為、これらを総称して三千大世界と言います。

この三千大世界についても、解説書が作られている。左の図は『須弥三界圖』というもので、中国で作られた。これには仏教でいう欲界、色界、無色界という迷いの世界が三段階で表現されており、上部には釈迦如来、薬師寺如来、阿弥陀如来の3仏が安置されている。

参考文献

- ・岡田正彦『忘れられた仏教天文学』ブイツーソリューション 2010年
- ・定方辰『須弥山と極楽 仏教の宇宙観』講談社 1973年

・禿氏祐祥 編『須弥山圖譜』龍谷大学 1926年

・広報「龍谷」2007No. 63「シリーズ・龍谷の至宝『須弥山儀』」龍谷大学

https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/63/05_treasure/index.html
(2023年10月31日最終閲覧)

・飛不動 龍光山正寶院「須弥山の詳細」飛不動尊 龍光山正寶院

<http://tobifudo.jp/newmon/betusekai/uchu2.html> (2023年10月31日最終閲覧)

あとがき ～貴重資料に触れて～

授業を通じて大変貴重な資料に触れることができる良い機会になった。また、仏教天文学という分野は一見マニアックに見えて、実際には仏教の思想や天文学、そして日本の仏教興隆の流れを時代をまたいで知っていることが前提となっており、膨大な知識が必要とされていると感じた。同時に、この分野において一つの学問領域を作るまでに至った円通の博識さと熱量には驚くばかりである。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、

展示品を除き申請が必要です。また、利用は学術研究目的に限らせていただきます。

令和6年5月6日発行

令和5年度 日本文化論A 受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2
横浜市立大学 学術情報センター